

Title	2種の「はじめ」について : 日英語比較研究
Author(s)	加藤, 主税
Citation	Osaka Literary Review. 16 P.1-P.10
Issue Date	1977-11-20
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25687">https://doi.org/10.18910/25687</a>
DOI	10.18910/25687
rights	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

## 2種の「はじめ」について

—日英語比較研究—

加藤 主 税

### 1. 序

「始めて」か「初めて」か、「始めまして」か「初めまして」か、さらに「始まり」か「初まり」かどちらが正しいかは、われわれ日本人でもたいへん迷うところである。さらに、「始め」と「初め」の差は直感的にたいへん微妙に感じる。これらの語は使用上あるいは表記上なんらかの区別があるだろうか。これらを明確に説明するために、英語 *beginning* との比較から、*eventive*—*non-eventive* の概念を採用してゆく。*eventive* NP とは基底構造に *EVENT* を有する NP のことで、換言すれば、「コト」を表わす「モノ」表現であり、*non-eventive* NP とは *EVENT* を有さない、「モノ」を表わす NP のことである。

*eventive*—*non-eventive* については拙論「“Eventive Construction 考” 1976。愛知工業大学研究報告11号」と「“Eventive NP についての日英比較” 1976。中部地区英語教育学会紀要6号」を参照されたい。本稿では「始める」「始まる」「始まり」「始め」「初め」などの語を *eventive* という概念を用いて考察する。

### 2. 始 と 初

- (1) 始める—\*初める— 終える
- (2) 始まる—\*初まる— 終わる
- (3) 始まり—?初まり— 終わり
- (4) 始め— 初め—\*終え

(5) ? 始めて—— 初めて

(6) ? 始めまして——初めまして

上の(1)–(6)は「始」と「初」の用法を示し、参考として、その反対語「終」の使用法を示したものである。(4)のように「始め」「初め」に対する「終え」という名詞形は存在しない。(3)(5)(6)の「初まり」「始めて」「始めまして」については、用法が流動的であるので「?」がつけてある。辞書によってその扱いが異なる。たとえば『広辞苑』では「初まり」「始めて」「始めまして」と認めているが、一方『角川国語中辞典』では「初まり」「始めて」「始めまして」の表記がない。次の(7)の表は種々の国語辞典の「始」と「初」の使いわけである。

(7)

	広辞苑	国語大	角川	広辞林	新明解	新辞源	新潮	新表記	用字用語
はじめ	始	始	始	始	始	始	始	始	始
はじまる	始	始	始	始	始	始	始	始	始
はじまり	始初	始	始	始	始	始初	始初	始	始
はじめ	始初	始初	始初	始初	始初	始初	始初	始初	始初
はじめて	始初	始初	初	初	初	始初	始初	初	初
はじめまして	始	ひらがな (初)	初	始		始	始	ひらがな	ひらがな

広辞苑：『広辞苑』岩波書店。昭和44年。

国語大：『日本国語大辞典』小学館。昭和50年。

角川：『角川国語中辞典』角川書店。昭和48年。

広辞林：『広辞林』三省堂。昭和48年。

新明解：『新明解国語辞典』三省堂。昭和47年。

新辞源：『新辞源』保育社。昭和38年。

新潮：『新潮国語辞典』新潮社。昭和40年。

新表記：『新表記辞典』第一法規出版。昭和48年。

用字・用語：『新用字・用語辞典』東京書籍。昭和48年。

(7)の表から、(3)(5)(6)の「初まり」「始めて」「始めまして」は認めていない辞書が多いのがわかるので、この小論では、これらのものを非文法的な

ものとして、それらの用法上の規則を探っていくことにする。

動詞の場合には「始める」「始まる」のように「始」が使われることは明白であるが、その名詞形において、「始」と「初」が使用上分かれるようである。順序として自動詞「始まる」の名詞形、さらにその中の eventive なものと non-eventive なもの、次に他動詞「始める」の名詞形の eventive なものと non-eventive なもの、さらに動詞性が薄れた「はじめて」などを考察していく。

### 2.1. 自動詞の名詞形

まず自動詞「始まる」の名詞形をとりあげてみよう。名詞形として認められている形態として「始まり」「始め」「初め」がある。

(8) セミが夏の(始まり, ? 始め, \*初め)を告げた。

(9) 夏の(\*始まり, \*始め, 初め)にはいつも山へ行く。

(8)の「夏の始まり」と(9)の「夏の初め」とはどのように異なるのであろうか。両者とも「夏が始まる」の名詞化形と考えられるものである。『角川国語中辞典』では、「始まり」「初め」の区別について、(10)のように述べている。

(10) 「はじまり」と「はじめ」とは意味領域に重なりを持つが、「はじまり」は始まる作用、すなわち「いつ・どこで、またはどのようにしてはじまるか」ということに重点が置かれるのに対して、「はじめ」は「はじめてからそのしばらく後までの部分」をさす。

つまり、「はじまり」は「～がはじまるということ」を意味し、「はじめ」は「～の最初の部分」つまり、「はじまる(はじめられた)もの(こと)」を意味し、筆者が従来から提案している、eventive NP, non-eventive NP の区別にまさに合致する。(8)(9)は英語では次の(11)(12)に対応する。

(11) the summer's beginning

(12) the beginning of the summer

(11)は eventive NP で、(12)は non-eventive NP の例である。

(13) その映画の(始まり, ?始め, \*初め)は7時だった。

(14) その映画の(始まり, 始め, 初め)はおもしろくなかった。

(13)について、主語は eventive NP の解釈のみ可能であるので、non-eventive の「初め」は非文法的であるが、(14)においては、eventive NP, non-eventive NP の両方の解釈が可能である。「始まり」の場合には eventive NP の解釈つまり、(15)になり、「初め」の場合には non-eventive の解釈で、(16)のようにパラフレーズできる。

(15) その映画の始まり方はおもしろくなかった。

(16) その映画の最初の部分はおもしろくなかった。

また言い残したことであるが、(8)(9)(13)(14)の「始め」については、文法性、非文法性がゆれている。「始め」と「初め」の区別について『角川国語中辞典』は(17)のように述べている。

(17) 「初」は主として時に關して用い、「始」は主として事柄に用いる。また『新表記辞典』も上記辞典と同様な内容のことを述べ、さらに次の用例を加えている。

(18) 「初」は「8月の初め」, 「始」は「ことの始め」のように用いる。この「初め」と「始め」の区別は(10)の「はじまり」と「はじめ」の区別に酷似している。つまり「初め」も「始め」も eventive NP であるが、「初め」はより non-eventive 的、「始め」は eventive 的ということができる。換言すれば「始め」は eventive な面から見て「始まり」と「初め」の中間に位置するようなものである。

(19) 私は人類の(始まり, 始め, 初め)に興味を持っている。

(19)において「始まり」は「人類がいかにして猿人から進化してきたかということ」を表わしていて、「初め」は「人類の初期」を表わし、「始め」はその両者の微妙な中間の意味を表現している。ただし「始め」について、「\*」(非文法的)か「?」(不自然)あるいは文法的であるかは、上記種々の辞書の扱い方からもわかるように、完全に流動的である。

## 2.2. 他動詞の名詞形

次に自動詞の場合と同様な手順で、他動詞の名詞形についての議論に移る。

㉔ 彼の研究の(し) (\*始まり, 始め, \*初め) は40才になってからであった。

㉔は次の㉕のようにパラフレーズできる。

㉕ 彼が研究を始めたのは, 40才になってからであった。

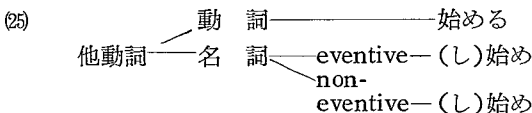
㉕から見れば㉔は eventive NP であることは明らかであろう。また㉔も eventive NP の例である。

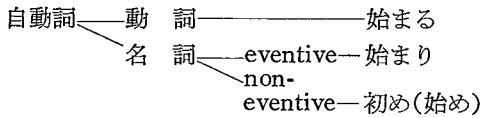
㉖ 彼の野球の(し) (\*始まり, 始め, \*初め) は劇的であった。

㉗ 彼の研究の(し) (\*始まり, 始め, \*初め) は植物学であった。

㉘ 彼が研究を始めたものは, 植物学であった。

㉗は㉘のように言い換えができるので, non-eventive NP の例である。これらの例から他動詞「始める」の名詞形は, eventive, non-eventive とともに「始め」であることが, わかる。「始め」は「始める」の連用形からの名詞形であって, 「始まり」が「始まる」の連用形からの名詞形であるのと平行的である。自動詞の名詞形である「始め」が non-eventive NP に近い eventive NP という不安定な立場にあるのに対して, この他動詞の名詞形である「始め」は「始める」の名詞形として, 決定的なものである。それゆえ, 前者の「始め」と後者の「始め」とは別の語, つまり同音異義語と分類すべきであろう。「始める」「始まる」「始め」「初め」を他動詞, 自動詞の差, さらに, 名詞, 動詞の差, および, eventive NP, non-eventive NP の差異を考慮すれば, 次の㉙のように明確に区別・分類できる。





### 2.3. 「はじめて」と「はじめまして」

「始めて」と「初めて」に関して、どの国語辞典も「初めて」については認めているが、「始めて」に関しては不統一である。(7)の表を参照すれば明らかであるが、「始めて」の表記がないのは『角川国語中辞典』、『広辞林』、『新明解国語辞典』、『新表記辞典』、『新用字・用語辞典』であり、(7)の表のうちのその他の辞典は、いずれも「始めて」「初めて」の両方の表記が見られる。特に表記についての基準ともなる『新表記辞典』、『新用字・用語辞典』に「始めて」を認めていないことは注目に値する。⑳㉑のように歴史的には「はじめて」は「はじめる」という動詞の連用形(て形)から派生したものである。

㉑ ? 始めて < 始める (て形)

㉒ 初めて < \*初める (て形)

ところが、㉑㉒のように「初める」は非文法的であるので「始める」からきたものであると考えられる。ゆえに「はじめて」は本来は「始めて」という表記が正しいのであったが、「はじめて」が動詞性を失ない、副詞として定着するようになって、「始めて」から「初めて」という表記に移ったと考えられる。「初」は「始」に比較して、語感が、㉑に述べたように、時に関係が深いということも「初めて」が好まれるようになったと思われる。

㉓ 彼はテニスを(始めて, \*初めて), 健康をとり戻した。

㉔ 彼は(? 始めて, 初めて) テニスをした。

㉓㉔のように「はじめて」という同一の形態が、㉓では動詞、㉔では副詞として用いられているので、それぞれ、「始めて」「初めて」となるのである。

次に「はじめまして」について、(7)の表から明らかなことであるが、『広辞苑』、『広辞林』、『新辞源』、『新潮国語辞典』は「始」を用い、『角川国語中辞典』は「初」を用いており、『日本国語大辞典』は見出し語としてはひらがなを用いているが、次の(80)(81)のように用例では「初」の例を出している。

(80) 早瀬さん、初めまして——『婦系図』〈泉鏡花〉

(81) これは初めまして、私は此(これ)の叔父の家内でございまして——『新世界』〈徳田秋声〉

『新表記辞典』と『新用字・用語辞典』は「はじめまして」のようにひらがなを用いている。この「はじめまして」も「はじめて」と同様に、(82)(83)のように「始める」から派生したものであるので、本来は「初」より「始」であるべきものであったが、動詞性が薄れて「初めまして」という形式が現われた。

(82) 始めまして < 始める (連用形) + ます

(83) 初めまして < \*初める (連用形) + ます

(84)のように本来の動詞の場合には「初めまして」は非文法的である。

(84) 私は昨年パイプを(始めまして, \*初めまして)……

現在では「初めまして」は「初めて」ほどは発達していないが、今後「始めまして」より「初めまして」と表記する傾向が強くなるということは、「始めて」から「初めて」への変化を見れば明らかであろう。

### 3. 「初日」と「初夏」と *beginning*

第2章において「始まる」の名詞形には eventive NP の「始まり」と non-eventive NP の「初め」の2種が存在することがわかった。英語の *begin* はどうであろうか。名詞形は動名詞の *beginning* だけである。この章においては *beginning* を「始まり」、「初め」と比較してみよう。(84)の文を名詞化したものが(85)(86)(87)であり、この順で名詞性が強くなり、もっとも強いのが non-eventive の(87)である。



- (34) 年が始まる。  
 (35) 年が始まること (+e)  
 (36) 年の始まり (+e)  
 (37) 年の初め (-e)

(+e) とは eventive のことであり, (-e) は non-eventive のことである。(34) (35) (36) (37) に対応する英語は次の (38) (39) (40) (41) である。

- (38) The year begins.  
 (39) that the year begins (+e)  
 (40) the year's beginning (+e)  
 (41) the beginning of the year (-e)

ところで(40)は eventive NP の解釈しか有さない。一方(41)は普通は non-eventive NP の意味であるが eventive NP の意味にもなり得る。

- (42) I saw the beginning of the trouble.

(42) は non-eventive NP (43), eventive NP (44) のようにパラフレーズできる。

- (43) I saw the cause of the trouble.  
 (44) I saw the fact that the trouble began.

(45) は non-eventive NP の解釈しか持たない。

- (45) What is the beginning of the trouble?

### 3.1. 修飾関係の交替

(37)における「年の初め」の名詞化がさらに進むと, (46)のような表現が生じる。

- (46) 年の初め→初めの年 (初めての年)

(46)のこの変化は意味変化である。英語においても(41)の the beginning of the year は修飾語と被修飾語が交替して, (47)のようになる。

- (47) the beginning of the year→the beginning year (the first year)

日本語の「初」を伴った熟語表現は(48) (49)のように多くが, 「はじめての

——」「最初の——」という意味を持つ。

(48) 初日 (最初の日)

(49) 初雪 (最初の雪)

その他、このようなものは次の(50)のようにたいへん数が多い。

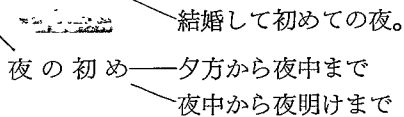
(50) 初年, 初代, 初犯, 初心, 初志, 初七日, 初対面, 初耳, 初旬, 初任, 初歩, 初版, 初校, 初編, 初耳, 初声, 初段, 初発, 初陣, 初時雨, 初婚, 初等, 初演, 初漁, 初潮, 初穂, 初午, 初寅, 初荷, 初裁, 初孫, 初夢, 初物, 初診……。

ところが「初夏」は「はじめての夏」ではなく、「夏の初め」という意味であって、このようなものは次の(51)である。

(51) 初春, 初秋, 初冬

(51)のようなものは、修飾・被修飾の交替ということと、もう一つ別の原因も考えられる。たとえば「初夏」は、本来「初めての夏」を意味し、これは「今年になって初めての夏」つまり、「夏の初め」という意味になったとも考えられる。このことは、修飾・被修飾の交替とも、あるいは、eventive と non-eventive とも密接な関係を持っている。(50)(51)の両用のものも存在する。(52)である。

(52) 初夜——初めての夜——その季節になって初めての夜。



夜の初め——夕方から夜中まで

夜中から夜明けまで

まだ(53)(54)のようにこの関係が語順で示されるものもある。

(53) 初年 (初めての年)

(54) 年初 (年の初め)

次の「始」付の熟語について、簡単に触れてみたい。「初——」が「修飾・被修飾」の関係であるのに対し、「始——」は(55)のように「動詞・目的語」の関係になる。

(55) 始業 (業を始めること)

また、⑥のように「——始」の場合には、「主語・動詞」の関係にもなる。

⑥ 年始（年の始まること）

ところが、この「年始」は「年初」という意味で用いられることが多い。

これは⑦のように eventive NP の non-eventive 化の例である。

⑦ 年始（eventive）→年初（non-eventive）

「始——」という熟語にも、この non-eventive 化の例が存在する。

⑧ 始審（審を始めること）<eventive>→

初審（初めての審）<non-eventive>

⑨ 始発（eventive）→初発（non-eventive）

⑧⑨はこの例である。

#### 4. 結 語

英語は自動詞・他動詞とも *begin* 一語で、その名詞形も *beginning* だけであるが、日本語は、他動詞「始める」、自動詞「始まる」、他動詞の名詞形「始め」、自動詞の名詞形「始まり」、 「初め」のように、厳密な語い体系を持っている。そして特に自動詞の名詞形が「始まり」、 「初め」の2種あることに関して、日本語が eventive と non-eventive を、語い上区別しているということはたいへん興味深い。またたとえば「年始」が「年初」の意味になるには、「eventive NP の non-eventive 化」という流れが底に存在しているということが、判明した。eventive 対 non-eventive という対応を認識することは、英語のみならず、日本語の研究にも有効であろう。